

非構造化インタビューにおける問う技法 —— 質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス

やまだようこ 京都大学大学院教育学研究科
Yoko Yamada Graduate School of Education, Kyoto University

要約

インタビューはアクティブな相互行為であるから、インタビュアーの「質問のしかた」が重要である。本論では、コンサルタント・インタビューと専門家インタビューの典型的事例をとりあげ、モデル構成的現場心理学の方法により、「質問の形式」「語り直しの形式」「質問ストラテジー」という分析概念を構成し、質問と語りプロセスのマイクロアナリシスを行った。話題を転換し拡張する質問、自他の位置を変換する質問、相手のことばの反復変奏や補足による語り直しの形式が有効であることがわかった。問う技法を明確にした本研究の知見は、インタビュアーの教育や熟達化のためにも、インタビューをナラティブ・プロセスとして分析し、^{リフレクシオン}省察する質的研究法としても役立つ。

キーワード

インタビュー、語り、質問、語り直し、マイクロアナリシス

Title

How do Interviewers Ask Questions in Unstructured Interviews?: A Micro-analysis of Narrative Process by Looking at Forms of Inquiry and Retelling.

Abstract

Given that active interactions between the interviewer and the interviewee constitute the narrative process of unstructured interviews, the techniques involved in making inquiries are especially important for understanding the production of generative narratives. I constructed three models for examining interview processes, focused on "forms of inquiry", "forms of retelling", and "approach-strategies to problems". The model constructions were based on observations in the field and techniques derived from qualitative psychology. The interview processes that take place in consultant and professional interviews were micro-analyzed. It was found that effective forms of inquiry included "turns, expansions, and changing the position of self and others", and that effective forms of retelling included "techniques for setting up variations and complements". The micro analyses of interview processes undertaken in this study will be useful for developing qualitative method reflexivity and for skill training in interviewers.

Key words

interview, narrative, inquiry, retelling, micro-analysis

インタビュー法は、心理学、人類学、社会学、歴史学、言語学、経済学など多くの人間科学で共通して用いられる質的研究の基本的方法として、ますます重要になっている (Flick, 1995/2002)。最近は、『インタビュー研究ハンドブック』(Gubrium & Holstein, 2002), 『インタビューング』(Fielding, 2003a; b; c; d), 『質的研究インタビュー』(Wengraf, 2001) などインタビュー研究を展望する本や、『ライフストーリー・インタビュー』(Atkinson, 1998), 『ロング・インタビュー』(McCracken, 1988), 『アクティブ・インタビュー』(Holstein & Gubrium, 1995/2004), 『フォーカスグループ・インタビュー』(Vaughn et al., 1996/1999) など、多様な専門的技法の解説書の刊行が相次いでいる。

インタビュー法は、人類学では従来から中心的方法であったが、インタビュー状況、インタビューの方法、インタビュー・プロセス自体が批判的に検討されるようになったのは、まだ最近である (Briggs, 1983 など)。

特に、大きな変化はインタビュアーとインタビュイーの関係性が根本的に問い直されるようになったことである (Langness & Frank, 1981/1993 など)。従来、インタビューを受ける人は、インフォーマント (情報提供者) と呼ばれ、いつ、どこで、誰が聞いても同じ「情報」が得られると考えられてきた。また、インタビューは、インタビュイーが自己の内側に固定して持っている情報や記憶をインタビュアーが質問によって引き出すことだと考えられてきた。

しかし、インタビュー状況は、インタビュアーとインタビュイーが相互にアクティブに関与する「相互行為」「共同生成」「対話」の場として考えられるようになった。このような研究者と研究対象との関係性と方法論の根本的な問い直しは、質的方法論の中核にあるものの見方や方法論の変革と連動しており、ナラティブ・ターン (物語的転換) と呼ばれて、他の学問分野でも同様に起こっている。社会学や心理学においても、被験者 (subject) から参加者 (participant) へと位置づけも呼び名も変わってきた (Holstein & Gubrium, 1995/2004; Gubrium & Holstein, 2002)。

インタビュー法は、ナラティブ・ターンによって、インタビューの記録法も根本的に変えられた。フィールド研究やエスノグラフィーの一部としてのインタビュー研究では、語られた内容はフィールド・ノートに

記されてきた。ノートにも優れた点は多々ある。しかし、大きな問題は「研究者」自身をインタビュー・プロセスの相互行為の当事者として省^{リフレクティブ}察的に分析することが難しいことである。研究者にとって都合のよいまとまりのある意味内容が記憶に残りやすいので、研究者の意図や予測を超える語り事例を後から発見することも難しい。

デジタル録音機器が普及して、語りプロトコルを悉皆的に記録するようになってからも、「質問」部分を見逃し、語られた「内容」のみが記録され分析されてきた。現在では、質問と語りの両方とも記述する方法がとられるようになった。

記録のまとめ方も変わった。研究者を特権的な位置において、研究者の意図で、ばらばらに語られたストーリーを年代順に並べ替えるなどの編集作業が無自覚に行われてきたが、研究者自身のことばも記録や分析の対象となってきた (桜井, 2002 など)。

インタビュー法の大きな変化は、次の4点にまとめられる。第1に、インタビューは、研究者を特権的な位置におくのではなく、人間が同じ人間として対等と位置づけられる相手から対話的に話を聞く人間科学の基礎的方法である。

第2に、インタビューを行う研究者は、自覚的かどうかにかかわらず、ニュートラルな存在ではありえず、インタビュー場面においてアクティブな相互行為を行う参与者として位置づけられる。

第3に、インタビュイーの語りは、「記憶の貯蔵庫」「回答の容器」「正確な情報」などとしてインタビュアーの内側に固定して存在していた既存のモノ (object) としてではなく、インタビュー状況のなかでインタビュアーとの共同生成的なやりとりによって生み出された生きもの (lives) として扱われる。

第4に、インタビュー行為は、それ自身が貴重なナラティブ研究の対象であるとともに、常に省^{リフレクティブ}察的に研究されるべき対象となる。

したがって、いつ、どこで、誰が聞いても同じ答えが貯蔵庫から引き出されると考えるよりは、質問のしかたが変われば、語られる内容も変わると考えたほうがいだろう。このような観点から、インタビューにおける質問のしかたは、単なる情報を引き出す「聞き取り」技術ではなく、ナラティブ (語り) という相互

行為の一環として、根本的にとらえ直されねばならない。

インタビュー法は、心理学では従来「面接法」と呼ばれてきた。しかし、この「面接」という用語は、相互行為としてのナラティブ・アプローチの見方や質的方法の基礎となる現代の多様な方法を全体的にカバーする用語としては狭すぎる。また、完全に対等で双方向的ではなく、暗黙の権力関係が入りやすい用語である。さらに、現代のインタビューは、必ずしも面接や対面（face-to-face）で行われるわけではなく、電話インタビューやオンライン・インタビューなど多様なメディアの利用が含まれる（Ibsen & Ballweg, 2003; Murray & Sixsmith, 2003）。したがって、インタビュー法と呼ぶほうが望ましいだろう。

心理学において面接法は、調査法の延長としての調査面接と、相談面接に分けられてきた（保坂・中澤・大野木, 2000）。調査面接では、質問紙調査と同様に、質問項目が研究者の側で構造化され、その回答を直接相手に会って面接して聞く手法である。質問項目をどの程度研究者の側で強固に設定するかによって、構造化、半構造化、非構造化という用語が使われてきた。ここで述べるインタビュー法は、この区分を用いれば広義の調査面接のなかの非構造化（あるいは半構造化）面接にあたる。

インタビュー法は、従来、プロフェッショナルな基礎技法としての教育や訓練の場もほとんどなかった。誰でもできる日常会話の延長と安易に考えられるか、名人芸的なア・ウンの呼吸でなされる会話術とみなされてきたからである。人間科学としてのインタビューの方法論の構築と教育方法の整備はこれからの課題である（やまだ, 2003b; 2005）。

一方、相談（臨床的）面接においては、実践的な訓練の場も豊富で技法も磨かれてきた。しかし、相談面接は、相談室や医療の場で行われる援助活動を基本としている。そこでは、語り手が自分では解決できない情動的問題をもち、その援助を求めて積極的にカウンセラーのところへやって来て、自分の話を聞いて欲しいと訴える人をおもに相手にしてきた。したがって、相談面接では、相手によりそって受容し、共感し、傾聴するなど情感的な「聞きかた」「聞く技法」が重要になる（東山, 2000）。

インタビューは、カウンセリングを主体とした相談面接とは、ラポールのつくりかたやインテークのしかたなど基礎的なところでは共通点も大きく、学ぶべきことが多々ある。しかし、相違点も大きいことを明確にしておくべきであろう。

インタビューは、ジャーナリズムでは「取材」と訳されているように、基本的にはインタビュアー（聞き手）が主導になって、問題とみなすテーマに関して、インタビュイー（語り手）から、話を積極的に聞き出す必要がある。語り手は、はじめから聞き手と問題意識を共有していたり、問題解決の援助を求めているたり、語りたというニーズをもっているとは限らない。したがって、聞き手の質問のしかたが特に重要で、質問しだいで語りの内容は多様に変化する。インタビュー時間にも限界があるので、通常の日常会話と異なって、わずかな質問で本題に入っていく、相手に自由に話を展開してもらいながら、こちらが聞きたい話題に焦点化して、相手の経験に深くかかわる語りを引きだしていかなければならない。

このように広義の調査法の一つであるインタビューの技法は、クライアントのケアや治療や支援を目的とした臨床技法としてのカウンセリングとは、基本的な考え方、アプローチ、技法などの専門性において相違があると考えられる。カウンセラーには、技能や技術を磨くために多様な専門的トレーニングが行われている。インタビュアーにも、組織的なトレーニングやスーパーバイズのシステムをつくっていく必要がある。インタビューの基本技能に加えて、たとえば外交官に聞く場合と少数民族に聞く場合など相手によって必要な能力や技法が異なるので、専門に合わせて技能を磨くトレーニングが必要であろう（Atkinson, 1998; 御厨, 2002; Thompson, 1978/2002; Vaughn et al, 1996/1999 など）。

以上述べてきたように、インタビューは、アクティブな相互行為やコミュニケーションとして行われるので、特に質問のしかたが重要となる。しかし、「問う技法」についての具体的な研究は非常に少なく、教育法やトレーニング法もほとんど整備されていない。初心者にはもちろん、経験者にとっても経験を省察したり熟達するための技法が必要である。

従来の研究では、インタビュアーの態度やインタビ

ューについての考え方に対する議論は多くても、実際にどのように行ったらよいか、具体例に基づいた検討が少なかった。また、数少ない具体的な研究においても、「閉鎖的問い (Yes - No 質問)」「開放的問い (W - H 質問)」「客観的問い」「主観的問い」「評価的問い」など少数の分類カテゴリーと例が並列的に示されるのみで、実際のインタビュー・プロセスのなかで、どのように用いたらよいかのわからなかった (Dohrenwend & Richardson, 2003; Wengraf, 2001)。それは、一般化と抽象化の水準を上げすぎて、概念化したカテゴリーが大きすぎたからだと考えられる。

そこで本論では、非構造化インタビューにおける「問う技法」に焦点をしばって、実践的に役立つ「現場」に密着した知をいくつか提供したいと考える。専門家が現に行っている具体的なインタビュー場面をもとに、どのように問うていけばよいのか、その技法をインタビュー・プロセスに即して実践的に明らかにしていくことが、この研究の目的である。

スプラッドリー (Spradley, 1979) によれば、非構造的インタビューには3種類の質問の型がある。第1は「記述的質問」である。これは、インフォーマントの活動について知るための問いである。第2は「構造的質問」で、これはインフォーマントがどのように情報を組織化しているかを知るための問いである。第3は「比較質問」で、インフォーマント自身が状況の意味について議論したり、状況とインフォーマントの世界において起こっている出来事との比較ができるようにする問いである。インタビュアーは、インフォーマントが自分自身の用語で状況を議論できるように促す役割をする。

バージェス (Burgess, 1984) は、スプラッドリーの考えを発展させて、インタビュアーは語りを促すために、どのような質問を実際にしたか、どのように話が展開したか、彼自身と生徒とのあいだで行われたインタビューの逐語記録の展開にそったコメントをつけて、事例をもとに分析を行った。

その結果、1) 単純な記述的質問で始めて、当人の知覚や自覚に気づかせる構造的質問に移り、それから彼自身の見方と他の見方との比較が必要な質問へ移る、2) インタビュアーのことばではなく、少年がもっていることばを使って質問をすることで、少年が自分自

身のことばで語れるように促す、3) インフォーマントがさらに情報を提供してくれるように確認のフレーズを繰り返すなど、おもに3点が見いだされた。

このバージェスが試みた方法は、いくつかの分類カテゴリーをあげて抽象的な例を示す方法 (Dohrenwend & Richardson, 2003; Wengraf, 2001) や、解説のあとに長いプロトコル実例を附表としてつける方法 (Riessman, 2003) などに比べて、きわだった長所をもつ。プロフェッショナルな技能をもつ専門家が実際に行ったインタビュー記録の成功事例、その典型的な局所をひとまとまりのシークエンスとして取り出し、逐語記録による会話の進行プロセスとその解説が一覧できるかたちで並行的に記述されているからである。しかし、彼のコメント自体は単純で常識的なものにとどまっている。

本論では、バージェスの研究を発展させて、絶妙に進行している彼のインタビュー・プロトコルを再度丁寧に読み込み、マイクロアナリシスを行うことによって、さらに意味ある結果を見いだしたい。「現場」データのマイクロアナリシスから、より一般化可能なルールを見いだす方法は、モデル構成的「現場」心理学の方法としても、実践的・理論的に価値が高いと考えられる。

なおマイクロアナリシス (微視分析、局所分析) は、自然科学分野で多く用いられ、「狭い局所をある程度まで深く多次的に分析する方法」であり、仮説検証よりも、仮説生成的・発見的方法として使われる。たとえば異物が混入した場合に、「異物は何であり、プロセスのどこで発生するかを明らかにする」など、時間シークエンスをもつプロセス分析や問題解決に役立つ。心理学においては乳児研究などで用いられ、記録された行動をゆっくり再生することにより微視的水準で切り出し、先行行動 A と後続行動 B の関係が、他の組み合わせの場合より有意に大きくなると A と B が関連を持つことを示唆する方法だと説明されている (河合, 1992)。心理学ではおもに量的研究で使われてきたが、質的研究においても、先に記した基本的特徴を重視すれば利用できる。

インタビュー・プロセスは、語り手と聞き手の相互作用や、そのときの場の状況に依存し、一回的で再現性をもちにくい。また、インタビューでは、実験や調

査的面接に比べて、研究者側のコントロールがきかないので、そこで何が起こるのか予測がたてにくく観察しにくい。しかし、「自然に」「自発的に」「なんとなく」話が展開しているように見える場合でも、インタビュアーとの複雑な対話的相互作用が生じているはずである。そこで実際のインタビュー ^{フィールド} 現場で何が起こったのかを記述し、そこからボトム・アップに、ある種のモデルとして一般化し理論化する方法（モデル構成的 ^{フィールド} 心理学）が有効と考えられる。それによって、^{フィールド} 現場と密着した実践的技法が見いだされるであろう。

また、事例から発見したことを、抽象的な概念や心構えや一般的態度の記述にとどめず、具体的な文脈を含んだ事例テキストとして記述し、生き生きとした具体性と理論性を兼ね備えた「半具象的モデル」（やまだ, 2002a）として公共化していく必要がある。それによって、実験や調査とは異なる方法ではあるが、反復・再現可能性（replication）と、反証可能性をもつ実証的研究としてのインタビュー研究を開拓することができよう。質的研究では、従来の信頼性や妥当性の概念をそのままあてはめることはできないが、省察性（reflectivity）によって信頼できる研究を蓄積していく必要がある（Flick, 1995/2002）。インタビュー・プロセスのマикроアナリシスは、研究の公共化と省察のためにも有効であろう。

本研究では、第1に非構造的インタビューにおける質問の形式について、成功した典型事例として、バージェスの事例をとりあげる。そして、それを基にマイクロアナリシスによってモデル化する道を探る。第2には、筆者自身が行ったインタビュー事例をもとに、^{リアフレクティブ} 省察的マイクロアナリシスを行い、現実のデータに密着したモデル化を試みる。

1 方法：事例の選択と分析概念の構成

本研究の方法は、モデル構成的 ^{フィールド} 現場心理学（やまだ, 1986; 2002a）に基づいている。その手続きは、表1にまとめた。

1 データと事例の選択

データとなる事例は、プロフェッショナルで巧みなインタビュー、そのなかでも詳しい逐語的な語りプロトコルが入手でき、質問と語りの相互行為において興味深い知見が得られるものを用いた。

事例1は、コンサルティング・インタビューの典型事例である。事例2, 3は、専門家インタビューの典型事例である。前者と後者は対比的で、インタビュアーとインタビューイの関係性と力関係は大きく異なる。前者ではインタビュアーのほうが専門家で権威をもつから、弱者であるインタビューイの立場に寄り添いながら核心に迫る問いを発する方法が重要となる。後者ではインタビューイのほうが社会的地位が高く、語り慣れているので、既存の「お話」を傾聴するだけに終わらず、鋭く核心に切り込む問いによって新しい生成的なインタビューができるかどうかが必要になる。

また、最終的に選択した事例の用い方も対照的である。前者では、導入から展開までの時間経過プロセスに焦点をあてながら分析する。後者では、特定のテーマに焦点化して、失敗例と成功例を対比的に分析する。なお最終的に選択し本論に記した語り事例は、半具象的な事例モデルとしても機能する。本論での事例は、分析される対象としてのデータでもあり、分析された結果を記述するモデル（典型的例示・範例）ともなり、二重の役割がある。

2 モデル（分析概念）

ここで構成されるモデル「分析概念」は、データを分類して数量化するためのカテゴリーや分類基準とは異なり、データを見るときの見方を示す概念枠組を示す。また、従来の実証的研究における「独立変数」と「従属変数」の区別のどちらにもあてはまらない。あらかじめ作った「独立変数」としての分析概念で、実際のデータを分析した結果（従属変数）を記述するという順序で研究がすすまないからである。両者は独立したものではなく、双方を往還する作業のなかでモデルが構成され、分析も進行する（やまだ, 2002a）。したがって、本論で記述される「分析概念（3種類）」と「事例と分析結果」は、すべて次元の異なるモデル

フィールド
表1 「モデル構成的 現場心理学」による本研究の手続き

<p>1) 典型性をもつフィールド・データの選択。できるだけ多様性、多文脈性をもつ、実際に行われた多事例のフィールド・データから、研究の合目的性、典型性、一般化可能性という観点から、データを選択する。(実際に分析を行って、うまくいかない場合や新しい視点が見つかった場合には、データ選択そのものからやり直す。)</p> <p>2) 選択したフィールド・データをもとにボトム・アップでモデル(分析概念)をつくる。(2と3の作業は実際には往還して行われる。)</p> <p>3) 今までの研究成果や理論からトップ・ダウンで重要な見方や概念を抽出してモデル(分析概念)をつくる。(2と3の作業は実際には往還して行われる。)</p> <p>4) 暫定的にできたモデル(分析概念)で実際のデータを分析し、モデルとフィールド・データの往還を繰り返しながら、モデルを洗練しつつ、分析結果をまとめる。(1までさかのぼってデータを選択し直す場合もある。)</p> <p>5) 最終的にできた「モデル(分析概念)」と「事例」と「分析結果」を一体として提示する。論文に事例として引用する部分は、1で選択したデータのなかのもっとも典型的な部分とし、それ自体が語りの「典型事例」として「半具象モデル」となるところまで最小限に洗練したかたちにする。</p>

とみなすことができる。しかし、すべて現場^{フィールド}密着型のローカルなモデルである。グラウンデッド・セオリア(Glaser & Strauss, 1967/1996)が示したように、過度なフォーマル理論を志向しないほうが、実践には役立つと考えられる。

また、ここでつくられた分析概念は、一般的なカテゴリーに分けること自体が目的ではなく、質問と語りシークエンスのなかで果たしている機能をその進行プロセスのなかで見やすくするためのものである。

分析概念を構成するために、まず典型となるインタビュー事例としてバージュス(Burgess, 1984)とやまだ(2002b)をとりあげ、そのプロトコルを何度も読み直した。そのインタビュー・データからボトム・アップを行う過程と、理論的なトップ・ダウンの過程の両方から、モデル化を行い、表2「質問の形式」(論文末)と、表3「語り直しの形式」(論文末)という2つの分析概念を構成した。

表2「質問の形式」は、おもにインタビューがどのようなタイプの質問をしているかを見るものである。本論において、特に独創的な概念は、表3「語り直しの形式」である。従来のように、インタビューアーの「質問(聞き方)」によって、インタビューイの「語り」が引き出されるという一方的な相互作用を考えるならば、「質問」と「語り」という用語のみでは

ずで、「語り直し」という用語を使う必要はない。しかし、語っているのはインタビューイだけではなく、聞き手であるインタビュアーも立場は異なるが相互的に「語っている」のだと考えれば、見方が変わるはずである。

それゆえに、本論では、「質問の形式」と並列して「語り直しの形式」という概念を導入した。これは、筆者の語り研究から見いだされてきた視点である。やまだ他(2000)は、「語り直し(retelling)」という概念を語りのキーワードのひとつと考え、「ズレのある類似とうつしの反復(やまだ, 2003a)」「語りの反復(やまだ, 2004a; b)」に着目してきた。本論では、それらを「語り直し」という用語で統一し、問う技法と関連づけて、さらに発展させたいと考える。その特徴は次の2点にある。

第1に、インタビューイが「語り手」であるだけではなく、インタビュアーも「語り手」と位置づけた。インタビュアーは、「問い手(聞き手)」という役割を担うと同時に「語り手」でもあると位置づける。したがって、インタビューは単なる「聞き取り」ではなく、インタビュアーは単なる「聞き手」ではない。このような見方によって、インタビュアーとインタビューイは両者ともに語りに参与し、両者の共同生成としてのインタビュー・プロセスが生まれることを把握

しやすくなる。

ただし、両者が共に語りに参加するといっても、インタビューでは、インタビュアーとインタビューの役割は明確にあり、その役割が自由に交替するわけではない。そこが、日常会話や談話の場面とインタビューにおける語り場面とが、大きく相違するところである。

第2には、語りを、ユニークでオリジナルな主体が独創的に語る個人的な物語とみなすよりも、いつかどこかで誰かが語った語りの反復やヴァリエーションとしての「語り直し」という観点からとらえる。「語り直し」は、語り手が行うだけではなく、「質問」にも使われると考えられる。

表2、表3ともに、語りの内容や語り手の個性や動機や感情などよりも、語りの形式や機能にもつばら注目していることも大きな特徴である。それは、プロップ (Propp, 1969/1983) が示したように、ナラティヴ (物語) のもっとも変化しにくい不変的な特徴は形式 (form) にあると考えるからである。インタビューや語りの内容は個々ばらばらで目的も文脈も異なることが多いが、語りの形式は、より一般化可能性が高いと考えられる。

II 分析1 コンサルタント・インタビュー事例のマイクロアナリシス

表4 (論文末) に示した事例1は、罰を受けた生徒に対する、教師 (研究者) によるコンサルタント・インタビューの一部である (Burgess, 1984)。事例の逐語記録をもとに、そこで何が起きているかをよりよく記述するためのモデル (分析概念) を作成し、それに基づいて分析した。表3に「質問の形式」と「語り直しの形式」の2つの分析概念を用いた分析結果をまとめた。

このインタビューは、あまり話したがらない少年 (インタビュー) に対して、本人の気持ちを積極的に聞き出して、問題に気づかせることが必要な状況である。臨床的面接に近いが、カウンセリングよりも教育・指導的な側面がより強い。インタビュアーのほう

が社会的地位が上で、ある種の強制力をもつインタビュー場面であるだけに、通り一遍のありきたりの問答や、指導的言説を相手に説明するだけの一方的なインタビューに終わる危険がある。

このインタビューを、3つのプロセスに分けた。まず「A 導入プロセス」を見ていただきたい。

ここでは、では、1 (一般問) のように、「あなた」「**について」というように相手や事象を直接名ざした聞き方ではなく、「誰か」「何か」「悪いこと」という一般的なことばによる問いかけで始めている。このような一般化した導入のしかたは、相手のことを直接聞かないので相手を安心させることができる。また話の展開の主導権を相手にゆだねることができる。

その問いかけに対してインタビューは、2 [自語・細語] によって、2種類の語り直しをしながら、逆に問いをインタビュアーに返している。そのときに、単に相手のことばをそのまま反復して質問するのではなく、自分のことばにし (自語)、明細化 (細語) して問い返していることが注目される。

自語による語り直しは、次のような効果をもつことがわかる。第1には、2のようにインタビューが「あなたは、**のこと言っているの?」とインタビュアーに主体的に質問する形式にすることによって、自分の位置を、インタビュアーに対して返答する立場 (受け手) から、質問する立場に役割をかえることができる。インタビュー状況をコントロールする主体が、インタビュアーからインタビューのほうに移動したといえよう。インタビューは、問答の形式のなかで回答者の役割をとることから解放されて、自分で自主的に問題設定をし直す自由があたえられたといえる。

第2には、1, 2, 4へと至るプロセスにみられるように「1 誰か」という一般的な問いかけから「2 人々」へ、そして「4 ぼく」へと、自分自身の問題として主体的にとらえるプロセスが示された。一般的な問いかけが、2の会話によって問いの主体が変換され、3ではインタビュアーが受け手になったあと、インタビューが自分自身の体験を自主的に語る方向へと話がすすんでいる。

細語による語り直しは、「1 何か本当に悪いこと」という問いからはじまって、「2 トラブル」へ、そして「4 鞭打たれる」と明細化・具体化されて語り直さ

れることによって、より問題が焦点化される方向に会話がすすんでいる。このように問題の具体化・明細化が、インタビュアー主導でなされるのではなく、インタビュイーの側によってなされていることが重要である。

問題が具体的になったあとは、「確問」や「細問」によって、いつ（when）、どうして（why）、何（what）など、どんどん内容を明確にし具体的にしていく質問を行っている。少年が「8 ちょっとしたこと（something）」とあいまいに答えると、「9 何をしたの？」とすかさず問い直している。これらの質問は、本当に知らないことを聞いているのではなく、インタビュアーにとってはすでに既知の出来事であるが、それを少年自身のことばで具体的に語ってもらうために質問しているのである。

次に、表4の「B 転換プロセス」を見ていただきたい。

ここでは、いちばんの焦点としてとりあげたい話題「鞭打ち」へと転換する10（転問）が行われている。一見さりげなく問うこの質問によって、話題が一気に「鞭打ち」へと変わったのであるが、このようにある程度話が進行したあと、重要な転換をつくる質問をすることが、インタビュアーの重要な仕事である。

インタビュアーは、11「そんなに前じゃない」という少年のことばをそのまま反復しながら、12「そんなに前じゃないって、どのくらい前なの？」と慎重に細分化させる質問を行っている。

さらに少年の気持ちを問う拡張する質問13をする。それは返答されない。少年は「あなた」と問われたことばを14 他語「あなた」で返し、まるで他人ごとのようにはぐらかして答えている。他者から問われたことを自語にして自分のことばで答えることを「同化」と考えるならば、他語は他者のことばを「他化」してはねつけているのである。

インタビュアーは、さらに相手のことばを逆手にとって「15 あなた」を再度反復して返すことによって、「あなた」を少年自身を指すものにしていく。その上で再度拡張質問を反復している。

少年は、再度自分に向かって聞かれた質問に対して、再び「他語」によって、他者の視点で語っている。彼は、このような「他語」を使うことによって、自分に

とって都合の悪いことや自分の気持ちに踏み込む質問を巧みにガードする防御の語りをしていることがわかる。

語り直しにおいて、この分析のように「自語」「他語」に注目することは、バフチン（Bakhtin, 1988, 1995）の対話理論と関連させると非常に興味深い視点をもたらす。彼は、たとえ自己のモノローグにみえるような発話でも、対話であると考えた。自己は、単一の自己として存在するのではなく、他者との対話をはらむ存在である。バフチンは、自己と他者との関係性について次のように述べている。「私が自己を意識し、自己自身となるには、ただ自己を他者に対して、他者を通じて、そして他者の助けを借りて開示するときである」（1988, p.250）。「他者に照らし出されることによってしか自己自身についてのいかなる言葉も形造られえない」（1988, p.253）。

バフチンの対話理論をもとにすれば、インタビューにおいて、他者から問われて自己が語るプロセスは、まさに対話的に自己を語る原理的モデルとなりうる場面のひとつと考えられるだろう。インタビュー場面は、自己と他者が攻防の対話を繰り返す闘いの場であり、自他のことばが入り乱れるアリーナである。

ただしバフチンが重視したのは、あくまで能動的な自己のことばや自意識であった。彼は、他者に照らし出されることによって、自分自身のことばが形づくられる方向性を重視する。自分自身のことばは、他者との「隠された論争」「内的論争」によって形づくられる。たとえば「隠された論争では、……同じテーマに関わる他者の言葉、同じ対象についての他者の主張を論争的に攻撃するように組み立てられる」（1995, p.394）。

本論での「語り直し」では、バフチンの対話理論の根底にある他者性や対話概念と共通性を持ちながら、異なる側面に焦点をあてている。つまり他者との論争をもとに自己を明確にして自己のことばを獲得していく能動的な行為としての「対話」とは、中核になる特徴が異なっている。

本論で焦点をあてる「語り直し」は、一見受動的な他者のことばの自己反復であり、他者のことばの反復やズラシによって自己をあいまいにしていく「自己隠し」や「自他すり抜け」の攻防である。また、本論で

は、他者のことばを他化して他者のものに返すことによって、自己を防御する「他語」という働きを新たに浮かび上がらせることができたといえよう。

インタビュアーは、少年自身の気持ちを聞く問いに2回失敗したあと、気持ちを聞くことを止めて、17では「エッセイか鞭か」という行為の問いに切り替えている。この問いは成功し、少年はなぜ鞭のほうがいいかを詳細に答えている。気持ちや動機よりも、行為のほうに答える側は抵抗が少ない問い方だといえよう。しかも、2つの行為を比較しながら問うことによって、より答えやすくしている。インタビュアーは、さらに19で「エッセイか鞭か」という話題を「鞭か停学か」という話題へと巧みに変化させて問いをつづけている。しかし、15「あなたはどう思う？」が成功しなかっただけでなく、19「どっちが悪いと思う？」という拡張質問も失敗する。少年は、再び20「他語」によって、他人ごとのように答える。

次に表4の「C. 拡張プロセス」を見ていただきたい。ここでは、今まで3回失敗した相手の気持ちを問う「拡張質問」を成功させた。「21 あなたの親」という相手が使った「他語」を利用した語り直し、そして「親」から「君」へ転換し、「どうして好きなの？」というポジティブな方向からの聞き方に問いを巧みに転換している。それによって24では、はじめて少年が「僕は好きさ、でも親はそうじゃない」と、まともに自分の感情を語った。また、前の文脈で語っていた親の立場からの見方も自主的に追加して、自分の立場と親の立場を関連づける、新しい意味生成が行われた。それ以後は、今までとは異なって、少年自身の気持ちや感情が語られるようになった。

このインタビューで、バージェス自身「私は、『何か本当に悪いこと』という聞き方で始めた。私は話題の範囲を決めて準備していたが、少年のほうから自発的に罰の話をしてくれた。私は彼らにひんぱんに使われていた二つの形式の罰を比較させたいと思った」とコメントしている。本研究では、さらに「問い方の形式」と「語り直しの形式」という分析概念によって、そのプロセスが詳細に解明できた。特に少年が「自発的」に語るようにみえた部分では、「自語」「他語」など自他のポジションが複雑に入れ替わって自他の攻防を行いながら語られていることがわかった。

バージェスは、導入のプロセスについては自覚しているが、その後でどのように核心に至る語りに展開・拡張できたのかについては考察していない。インタビューでは、単にインタビュアーやインタビューがすでに知っていることや、語り慣れたこと、聞き慣れたことを再度聞き取って記録することに意味があるのではない。それよりも、インタビューという対話の場で、どれだけ新しい意味生成が行われるか、つまりインタビューにとっても新しい発見がある展開を、語りから生み出していけるかどうかが重要である。

従来のインタビュー法では、相談面接の影響もあって、ラポールの作り方や導入プロセスについての研究は行われてきた。しかし、質問によってどのようにアクティブに相手の領域に切り込むか、あるいは相手が自覚していなかった内容にまでインタビュー場面で語りを共同生成していくという見地から、さらに踏み込んだ質問のしかたが論じられることはほとんどなかった。この見地からは、新しい展開を生むための拡張質問をどのように行うかが重要であり、拡張質問のしかたが、インタビューの善し悪しを左右する要になると考えられる。そこで次に分析2では、特に拡張質問のしかたに焦点をあててみたい。

III 分析2 専門家インタビューにおける拡張質問：失敗例と成功例のマイクロアナリシス

分析2では、拡張質問のしかたについて、その失敗例と成功例の語りプロセスのマイクロアナリシスを行う。事例は、年配の専門家（人類学者）に、後輩の専門家（心理学者・研究者）がインタビューした筆者自身が関与したインタビューを^{リフレクティブ}省察的にとりあげる。この事例は、論文にする前の逐語記録である語りプロトコルに基づいている（やまだ, 2002b）。なお、論文の記述（川喜田他, 2003）とロー・データに近い語りプロトコルの相違については、やまだ（2004b）において比較したので参照されたい。

事例2, 3は、専門家インタビューの事例である。これは、経験豊富な年配の専門家に人生経験を聞くインタビューで、新聞記者などジャーナリストが政治家

や研究者など専門家に聞き取るインタビューに近い。ただし、専門的回答を得ることが目的ではなく、より自由にその人の経験の生の実態に迫ろうとするライフストーリー・インタビューである。

このようなインタビューでは、事例1と逆にインタビューのほうが社会的地位が上で、話も巧みであることが多いので、語り手主導のペースになり、聞き手は語り手の既成の「お話」を拝聴するだけになる危険がある。また、インタビュアーもある程度の知識をもつ専門家なので、あらかじめ知的に準備した自分自身の既成の枠組みにそって、相手の話を聞いてしまう危険もある。

表5は、同じインタビュー場面の連続する会話のなかで、拡張質問が失敗した事例2と、成功した事例3のプロセスをまとめたものである。

表5の事例2は、一見すると何の問題もなくスムーズに楽しく話がすすんでいるように見える会話の場面である。しかし、詳細に検討すると、インタビュアーが出した質問に対して、インタビューは答えないままで、双方の会話がすれ違っていることがわかる。

インタビューは、事例2の語りの前で、フィールド科学には、「創造的総合」があると語ってきた。それに対してインタビュアーは、「創造的総合と質的研究とはどう関わるのか？」とさらに深く問題に切り込む質問を2回反復している。インタビューは「そうなんです」「そこが問題の焦点なのです」という肯定的な返事で受けている。しかし、肯定的返事をしながら、実のところは質問に答えていない。インタビュアーは、同じ質問を同じ用語で繰り返しているが、その質問は相手に受け止められないで、話題が転換される。

インタビューは語りの名手であり、表5の5K、6Kのように体験談を具体例を交えて生き生きと楽しく語り口も語られた話も興味深い。このような場合、インタビューの現場では成功しているように感じられる。しかし、インタビューが主導権をもちすぎると、相手のペースで話を拝聴するだけになる危険があり、問題を深めていきにくい。

表5の事例3は、事例2にひきつづく会話であるが、展開が異なっている。事例3ではフィールドワークとフィールド科学の相違についての同様の説明のあと、インタビュアー1が「現場からの取材と創造的総合と

2つがあって、科学として全体がある」と、相手がいいたい内容の要旨をまとめる「略語」をしている。これはインタビューが言わんとしたことをインタビュー以上に的確にまとめた語りになっている。

それを受けて、インタビュアー2が「エスノグラフィーとの違い」を問う新しい質問を投げかけている。これに対してもインタビューは十分な答えをしない。そこで、インタビュアー1が、「異語」で相手のことばを受けながら少しかたちを変えて語り直す。それを受けて、再度拡張質問を行う。インタビュアー2人は、相互に補いあいながら、もっとも知りたい本質的な問いをはずさないように、互いに問いを発していることがわかる。

転換は、「エスノグラフィー」というインタビュアーのことば（他者のことば）を、「名人芸」というインタビューのことば（自己のことば）に変換して語り直したときに起こった。さらに、「最終プロダクト」というインタビュアーのことばは、「モノグラフ的名作」というインタビューのことばに変換された。相手の琴線にひびく問いかけをするのは、同じことばを反復して問うだけではなく、相手の言いたいことを要約的にまとめたり、異なることばに変奏的に変えて問い直したり、少し違うことばで繰り返し語り直すなど、質問者がアクティブな働きをすることが重要である。

ここでみられるような問いや語り直しから、共同生成のプロセスを知ることができる。インタビュアーは心底から知りたいと思って質問するが、インタビューもあらかじめ答えを知っているわけではないので、両者が共に未知の問題の答えを求めて、共同して問いと語りを生成的に反復し、共に考えあいながら話題を進行させている様子がわかる。

また、これらの問いへの答えを模索するなかで、突然のように新しい話題（KJ法のはじまり）へと生成的に発展したのは、偶然ではないだろう。「名人芸（エスノグラフィー）とどちらがうのか?」「従来のモノグラフ的名作（エスノグラフィーの最終プロダクト）とはどう違うのか?」という問いを繰り返し突き詰めていったところで、「(名人芸、従来のエスノグラフィーとは異なる) KJ法のはじまり」という新しい話題へと生成的に拡張したのである。

もちろん最初から「KJ法はどのようにしてはじまったのですか?」という問いを発することで、どのようにはじまったのかという経過を知る語りは得ることができたであろう。しかし、その場合には、このインタビューの展開のように、フィールド科学とは何か、KJ法のエッセンスは何か、それは従来のエスノグラフィとどのように異なるのかなど、KJ法の特徴と位置づけを明確にし、その核心を鋭く突く語りを共同生成的に構成することはできなかったであろう。

このインタビューは、インタビュアーにもインタビューイーにも双方にとって「たいへん啓発的で楽しかった」と記憶されている。それは語り合うことで「なるほど、そうなんだ!」と互いに核心にふれて理解しあえる生き生きとした共同生成のプロセスを体験したからである。

表6(論文末)は、分析1と分析2をまとめて作成した。答えにくい話題をどのようなストラテジーで問いかけていくかという技法をまとめたものである。どちらの分析においても、3-1 迂回、3-2 休止再問、3-3 変奏反復、3-4 形式変形などのストラテジーが効果的に用いられていた。

分析1と2を合わせて問い方のプロセスを詳細にみると、1度問うだけですぐに的確な答えが返ってくるほうが珍しく、インタビュアーは少しずつ問い方を変えて、何度も繰り返し語り直しながら聞いていることがわかる。インタビュアーのことばと、インタビューイーのことばはズレをもつことが多く、相手の深いところまでは浸透しにくい。他者のことばが自分のことばとして受けとめられなければ、通り一遍の回答になってしまい、生成的な展開を生むことは難しいといえよう。したがって、聞き手も語り手も互いに何度も語り直すことは、冗長なようであるが、たいへん重要な語りプロセスだと考えられる。

インタビュアーが問いを語り直しながら反復するプロセスも大きな意味があることがわかった。その場合に、ただ同じ問いを反復するのではなく、ヴァリエーションのある語り直しをすることが重要である。まるで交響曲のように同じ主題をめぐる、少しずつ調子が異なる変奏曲が循環的に奏でられるからこそ、転換や拡張の問いをしても、相手にきちんと受け止められて効を奏するように思われる。

このような問いと語りの相互行為プロセスをみると、1回の質問で「はい、いいえ」「賛成、やや賛成、非常に賛成」「〇〇は?△△です」などの答えが、問うと即座に返ることを期待する構造的インタビューの問答では、その問いがどの程度相手にとって意味あるものとして受け止められているか、どの程度信頼できる答かは、かなり疑問であろう。

表6において3-5「自他の位置変換」は、特に分析1にきわだってみられた。インタビュアーは相手に自分自身の問題として主体的にとりくみ主体的に語ってもらうために、この手法を巧みにきめ細かく用いていた。教育場面でのコンサルタント・インタビューにおいて、話すことをためらう相手の立場に立って、相手の気持ちに寄り添うことが必要な場合に特に効果をもつ技法であろう。

表6において3-6「補足説明」は、特に分析2にきわだってみられた。インタビュアーは、質問の意味を補ったり、相手の語りの内容を要約したり、背景情報を提供したりして、アクティブに語りの共同生成に関与していた。これは互いにある程度の知識を共有しながら共に新たなものを見いだしていこうとする専門家インタビューにおいて、特に効果的なストラテジーであろう。聞き手も語り手もある程度対等で、共に主体としてインタビュー状況に参与して、語りから発見されることや、新たに見えてくる世界を共同で構成しながら共に楽しむインタビューが行われるのである。

まとめ

(1) 問い方と語り直しプロセス

「自然に」「自由に」話が展開していくようにみえる非構造化インタビューにおいても、研究者の問いの出し方によって、相手の答え方は大きく変わっており、そこでは相互行為や対話として語りの共同生成が行われていることがプロセスのなかで明らかになった。

特に本研究では、語り手はインタビューイーだけではなく、聞き手であるインタビュアーも立場は異なるが相互に「語っている」のだと考えた。「語り直し」概念を導入することによって、語りの反復のしかた、異

なることばで詳細化して語り直すプロセスや、自己と他者の位置を変換させる語り直しのプロセスが事例に即して明らかになったことは重要である。やまだ(2003a ; 2004a ; 2004b)は、「語り直し」と「自他の関係性」に着目して、うつし・ズレのある反復・重ねなどの概念を、バフチンの対話理論と関係させて論じてきた。本論では、その理論的知見を具体的なインタビュー場面に応用して考察を試みたが、さらに事例を加えて理論的に考察することは今後の課題である。

また、従来、ラポールの作り方や態度や導入のしかたについては研究されてきたが、どのようにインタビュー者の関心ある話題に転換するか、どのように相手に質問によって深く切り込んでいくかという展開や拡張のしかたについては、詳しい研究がなかった。本論における「拡張質問」の分析は、重要な知見を提供すると考えられる。

以上のように本論の分析は、インタビューのプロセスについて基本的で理論的な見方を提示したと考えられる。どのような「問い」が、どのような「語り」を生み出すかという因果的で一方向的な見方ではなく、「問い」が先の「語り」を「語り直す」ことで、さらなる「語り直し」が生まれるなど、問いと語りと語り直しプロセスのダイナミックスを具体的に提示した。このようなインタビュー・プロセスの分析は、ナラティブ研究としても興味深い知見をもたらすであろう。

(2)インタビュー事例の分析法と省察

本論では、実際に行った典型的なインタビュー場面を事例にして、インタビュー・プロトコルとコメントを併記しながら時間展開にそって分析するマイクロアナリシスの方法を提示した。このようなインタビューのプロセス分析は、インタビューを行うときの問いかたの技法を考える上で実践的に役立つと考えられる。

本論のように典型事例モデルを提示しながら解説する方法は、インタビューの方法を実践的に教育するために役立つだろう。また、質的研究の信頼性を高めるために必須とされる^{リアプレクティブ}省察性を高める技法としても役立つだろう。自己や他者が行ったインタビューを反省をこめて、もう一度逐一いねいに振り返って、よりよいインタビューが可能になるように自己訓練する場合や、教育訓練や教育実践の手法として、本論の

方法は役立つと考えられる。

一回性が強いインタビュー場面に、科学の基本である再現性(replication)を文字通り求めることは難しい。再現性を期待するあまり、簡単な構造にし、研究者の操作性を強くして、インタビュー場面の自由な展開を殺してしまうとしたら、本末転倒である。各自の研究者が少数事例しか持ちえない質的研究においては、自己の事例だけではなく他者の事例も相互利用できるような公共化が必要である。しかし、インタビュー場面は数時間に及ぶので、語りプロトコルは延々と長く、他者の事例を深く読み込んで理解することは容易ではない。そこでインタビューのなかで、理論的テーマを体現する典型的な部分や成功・失敗を分けた局所をまるごとシーケンスとして取り出して、そこをマイクロアナリシスする方法が有効だろう。

なお本論で提出したのは、限られたインタビュー事例をもとにした^{フィールド}現場密着型のモデルである。分析概念としてあげた用語は、今後さらなる精緻化や検討を要する。また、この分析は、すべての非構造化インタビュー全般にそのまま通用するわけではない。戦争体験や被差別体験など、ことばにして語りごと自体が難しいトラウマを抱えた経験にアプローチするときのインタビューにおいては、問い方も展開も異なることが考えられる。典型事例は、インタビュー状況や関係性や内容をふまえて、各種を積み重ねて比較検討していく必要がある。

(3)心理学研究法への示唆

本論の議論は、研究法としてのインタビュー法の発展のみならず、ほかの心理学の研究法の発展にも役立つと考えられる。

まづインタビュー法を方法論として明確にしていく必要がある。非構造化インタビューという呼び名も、現状ではやむなく使っているが、望ましい名前ではない。非構造化インタビューは、インタビューの主体性や自由度を最大限に尊重するインタビューであるが、何の「構造」もルールもない場当たりのものではない。本論で示したように、ある程度の合理的な質問ストラテジーや生成的に展開する構造をもつ。また、十分な準備と訓練を必要とする。

本論の方法は、実験法や調査法にも大きな影響を与

えると考えられる。たとえば、実験場面における目撃証言も、インタビュー法の一環として見直すことができる (Geiselman et al., 2003)。質問紙 (written questionnaire) 調査も、対人インタビュー、電話インタビュー、メール調査、パネル調査など多くの調査法の手法の一つと位置づけられる (Charles & Ballweg, 2003; Leeuw et al., 2003; Oishi, 2003)。

実験法や調査法においても、「研究者」を特権的な位置においてきたことが反省されねばならない。従来、質問紙調査は、質問のしかたよりも、得られた回答の

みに焦点があてられ、もっぱらデータ分析を統計的に精緻化する方向で研究が進んできた。質問紙法もインタビュー調査法のひとつと考えれば、研究者と回答者の関係性や、質問のしかたや質問順序を深く考慮し、問い方を変化させると答え方がどのように変わるかというような発想の研究が必要になるだろう。また実験や調査の際に、今までも簡単な被験者報告や自由記述がなされてきたが、それでは不十分であり、インタビューを組織的に組み込んだ研究計画を立てる必要があるだろう。

表2 分析概念1 質問の形式：具体例と機能

1-1. 〈般問〉一般化 (generalization) した質問

もし、**が起ったらいかがでしょうか？
 **のような場合には、どうでしょうか？
 もし、**の立場だったら、どう思われますか？

ばくぜんと一般的に問う。インタビューのことを直接聞くのではないから安心させられる。ここからどのように話を展開することができ、主導権をインタビューにゆだねることができる。導入のときや、聞きにくい話題のときに効果的である。また、話題が非常に狭い袋小路に入ったときに、転換したり、拡張するためにも使われる。

1-2. 〈認問〉確認 (recognition) したり、同意する質問

それは、**ということですか？
 そうですか？
 なるほど、**ですね？

インタビューが言ったことを確かめる。厳密な同定 (identification) や確実性をもとめる確認 (confirmation) というよりも、インタビューに軽く自覚を促したり、同意や許容を表わしたり、あいづちのために使うことが多い。語り直しの形式と連動して使うと効果的である。

1-3. 〈確問〉正確化 (precision) する質問

それが起ったのは、いつでした？
 それは**に住んでいたときですか？
 そこでちょっと、確認しておきたいのですが、それは**の1年前ですね？

日時、人名、表記、前後関係などをより正確にするための質問。明細化の機能と重複することもあるが、より限定したかたちで短く挿入的に問う場合があてはまる。口述では後で資料にしたとき欠如した部分や勘違いによる矛盾などが生じやすいが、それを補充したり正確にする役割を持つ。また、この質問をすることで、インタビューの言うことを聞いているという確認になり、インタビューへの理解を深めると共に、きちんと聞いてもらっているという信頼感が高まる。しかし、話の流れを中断することもあり、文脈のなかでこの質問を入れるタイミングが難しい。詰問になると逆効果である。

1-4. 〈細問〉明細化 (specification), 具体化, 例示, エピソード等をきく質問

それについて、例えばどんなことがありましたか？
そのことで、思い出す出来事はありますか？
そのとき、あなたはどうしました？
そのとき、どんな感じでしたか？
そのとき、一緒にいたのはどなたでしたか？
それから、どうなりました？
そこを、もう少し詳しく話していただけませんか？
なぜ、そんなふうにしたのでしょうか？
そのあと、どうなりましたか？

インタビュー어가 語った内容をさらに詳しく展開してもらったり、より深く踏み込んで聞く。この質問のしかた如何で、表面的な問答で終わるか、より深い内容や発展的な話題を語り手が自覚的に展開してくれるかが分かる。いつ (when)、誰が (who)、どこで (where)、なぜ (why)、どのように (how) などを聞くが、質問のしかたは問答にならないように、一般化と同様に、できるだけインタビュー어に主導権をもってもらえるようにする。語り直しの形式と連動して、インタビュー어への共感や理解を示しながら、インタビュー어への関与を深めていくやり方も有効である。

1-5. 〈転問〉話題等を転換 (turn) する質問

ところで、あの出来事は？
ちょっともどりますが、前に話された**は？
話は変わりますが、**についてはいかがですか？

インタビュー어の話題を別の方向へ転換させる質問である。インタビュー어가好んで話したいことは、インタビュア어가聞きたいこととずれることが多い。話題の焦点が拡散したり、同じところを循環してしまう場合もある。そのときに自然に話題を転換させ、主導権をインタビュー어から、インタビュア어へと転換させ、本来の話題に焦点化する。しかし、急いでインタビュア어의ペースに合わせようとすると失敗しやすい。当面関係ない話を含めて相手が言いたいことをひととおり言ったあとや、何げなくその話題が出てくるまで待つとよい。

1-6. 〈拡問〉話題や話の内容を拡張 (expansion) し、本質を追求し、話題を発展させる質問

それと比べて、**は？
あなたは**について、どう思われますか？
私は**ではないかと思いますが、いかがですか？
今おっしゃったことは、**とどう違うのでしょうか？
まだ他に**もありますか？
立場を変えれば**という見方もできますか？
世間では**と信じているようですが？

インタビュー어の話題の範囲にない質問や相手の考え方へと、インタビュア어가積極的に導いたり、深く本質を追求する問いを発する。インタビュア어가相手の話の聞き役から、対等の対話者へと役割を変換する質問である。対話者としての役割をとり、インタビュア어自身の考えや別の対比的視点を導入することによって、インタビュー어의考えをさらに深く知ることができる。また、インタビュー어가気づいていない関連話題へ拡張したり、討論することによって、相手の語りを飛躍させたり、共同生成的に新しい展開を生むことができる。しかし、相手が拡張質問にのってこない場合や、意見が大きく相違して闘争的になりすぎたり、インタビュー場面全体が沈静化する場合には、修復する働きかけが必要になる。

表3 分析概念2 語り直しの形式：具体例

ことばや話題を反復する語り直し

- 2-1 ^{カタリ}【同語】同語語り直し (repeat) : ことばや表現の一部を、ほぼ同じように繰り返す。
例) * 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか。」 「車を見たのは、昨日でした。」
- 2-2 ^{カタリ}【異語】変異語り直し (variation) : ことばや表現を、少し変えた類似形や変異形にする。
例) 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか。」 「昨日でしたか、見たのです。」
- 2-3 ^{カタリ}【略語】要約語り直し (summary) : 語られた内容の要旨をまとめたり、簡略化する
例) 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか。」 「昨日見ました。」

自他関係を転換する語り直し

- 2-4 ^{カタリ}【入語】移入語り直し (import) : 他者のことばをそのまま自己のことばに取り入れる。
例) 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか。」 「私が車を見たのは、昨日でしたか。」
- 2-5 ^{カタリ}【他語】他者語り直し (others) : 他者のことばや視点によって言い直す。
例) 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか。」 「あなたが車を見たのも、昨日でしたね。」
- 2-6 ^{カタリ}【自語】自己語り直し (me) : 他者のことばを、自己の視点やことばにして言い直す
例) 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか。」 「私が車に気づいたのは、昨日のことでした。」

話題を発展させる語り直し

- 2-7 ^{カタリ}【細語】明細語り直し (detail) : 語られた内容をより明細化・具体化する
例) 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか。」 「私が白いルノーを見たのは、昨日の夕方でした。」
- 2-8 ^{カタリ}【関語】関係語り直し (relation) : 別々の文脈で語られたことを関係づける
例) 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか。」 「昨日、あの赤い車も隣に停まっていた。」
- 2-9 ^{カタリ}【転語】転換語り直し (change) : 語られた内容を別の内容に変化・転換する
例) 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか。」 「車を見たとき、ライトが消えて真っ暗でした。」
- 2-10 ^{カタリ}【般語】一般化語り直し (generalization) : 語られた内容を一般化したり、拡大する。
例) 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか。」 「昨日ですが、駐車違反はよくないことです。」

* 語り直しの形式は、質問にも回答にも、どちらにも使用できる概念である。質問も回答もどちらも「語り」と「語り直し」の一種として考えるからである。したがって、たとえば、2-1 の例) 「あなたが車を見たのは、昨日でしたか? (語り)」 → 「車を見たのは、昨日でした。(語り直し)」は、質問の位置を逆にして「車を見たのは、昨日でした。(語り)」 → 「車を見たのは昨日でしたか? (語り直し)」という例にすることもできる。以下、ほかの例でも同様である。

表4 インタビューにおける質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス——先生による罰を受けた少年へのインタビューより

《事例1 インタビュアー：RB (Robert, G. Burgess), インタビュイー：少年 (16歳の少し知的に低い生徒)。Burgess (1984) より》

会話の具体例 (Burgess, 1984. 日本語訳：やまだ)	〈質問〉と〔語り直し〕の形式 (やまだの考察)
A 導入プロセス	
1 RB (インタビュアー)：ここで誰かが、何か本当に悪いことしたとき、何がおこるだろう？ (What happens when anybody does anything really bad here then?)	1 〈一般問〉「あなた」「* * *について」というように相手や事象を直接名ざした聞き方ではなく、「誰か」「何か」「悪いこと」という一般的なことばで問いかける。
2 少年 (インタビュイー)：人々がトラブルを起こしたときのこと、言ってるの？ (You mean when people get into trouble?)	2 〔自語・細語〕インタビュイーは、インタビュアーの質問に対して二種類の語り直しをしながら、逆に問いを返している。しかも、単に相手のことばをそのまま反復して質問するのではなく、自分のことばにする (自語)、問題の要点をしぼって焦点化し (要語)、明細化 (細語) して問い返している。
3 RB：そう。	3 (同意・肯定)
4 少年：ぼくは鞭打たれたし、二回停学になった。(I've been caned and I've been suspended twice.)	4 〔自語・細語〕「1 誰か」が「2 人々」へ、そして「4 ぼく」へ。「1 何か」が「2 トラブル」へ、そして「4 鞭打たれる」「4 停学」へと、自分自身のことばによる自分の体験の語りへと変換されると共に、内容が明細化・具体化されている。
5 RB：それはいつ (When) だった？	5 〈確問〉出来事が起こった時を限定する質問。この質問は4で語られた内容をさらに明確化する質問である。
6 少年：5年生の最初。5年で2回。	6 〔細語〕より明細化した答えをしている。
7 RB：どうして (Why) そうなったの？	7 〈細問〉出来事が起こったコンテキストや内容をより具体化し、発展させる質問である。
8 少年：先生と、ちょっとしたこと (something) があった。	8 〔転語・般語〕「どうして？」という問いには答えず、話題を転換すると共に、一般化しあいまいにしている。
9 RB：何 (What) をしたの？ (以下、長いやりとり略)	9 〈細問〉この出来事はすでに聞き手には既知の情報だが、それを生徒自身のことばで具体的に語ってもらうために質問している。
B 転換プロセス (重要な話題への転換)	
10 RB：鞭打ちされたこともあるの？	10 〈転問〉最初に出た本来の話題である鞭打ちへと、話を転換するための重要な質問。
11 少年：そう、何度も鞭打ちされた。そんなに前じゃない (Not long ago)。	11 〔細語〕問題となる体験を具体的に初めて語る。
12 RB：そんなに前じゃないって、どのくらい前なの？ (When you say not long ago, how long ago was that?) (以下略)	12 〈細問〉〔同語〕インタビュイーと同じことばをインタビュアーが反復して使いながら、そのことばを使って詳細を質問することで会話を継続させる。
13 RB：何度も何度も鞭打たれて、あなた (you) はどう思うの？	13 〈拓問 1〉出来事を詳細に聞くだけではなく、その出来事を本人がどのように思っているかに踏み込む。
14 少年：あなた慣れてきてる。(You get used to it.)	14 (拓問に対する直接の返答はない) 〔他語〕相手が使った「あなた」という語をそのまま反復使用し、自分のことを他人ごとのように語る。

<p>15 RB：そう、あなたが慣れてきている。(Yes, you get used to it.) しかし、あなたはどう思うの？</p>	<p>15 [同語・入語・転語] 「あなた」を再度反復し、相手が使った「あなたが慣れてきている」という同じフレーズを取り入れて反復しながら、「あなた」の意味を転換・逆転させた。その上で〈拡問1〉により、相手の気持ちに踏みこんで質問する。</p>
<p>16 少年：彼ら（先生）はあなた（you）に鞭を与えて、それだけさ、気にしていない。ロイドは僕たち（us）に鞭がいいか長いエッセイを書くか選べたので、僕（I）は鞭がいいと言った。</p>	<p>16 [他語] 他者「彼ら」の視点からの三人称の語り。自分がどう思うかを語るかわりに、先生がどう思っているかを語る。 [自語] 「僕たち」を主語にした自分の視点からの語りができた。しかし行為についてのみ語り、質問された「自分の気持ち」については答えていない。</p>
<p>17 RB：エッセイの代わりに鞭を？</p>	<p>17 [確問] この質問について、インタビュアーにとっては既知情報だが、無知を表現することで、少年自身のことばで語らせたかったのだと RB はコメントしている。</p>
<p>18 少年：そう、エッセイは時間がかかるけど、鞭は2、3分だからね。</p>	<p>18 [自語・細語] 素直に自分のことばで答える。聞かれた以上の内容の細部を具体的に答える。</p>
<p>19 RB：今、あなたはあるときは鞭打ち、あるときは停学と言ったね。どっちが悪いとあなたは思う？</p>	<p>19 [異語] 相手のことばを反復しながら、エッセイと鞭打ちを、鞭打ちと停学に変形した。その上で〈拡問2〉を行う。前の文脈（15）で一度聞いて答えが得られなかった質問（これが本来聞きたい質問）を再度表現を変え、二つの罰を比較する視点を導入して「どっちが悪いと思う？」という選択形で問う（15では、「あなたはどう思う？」と聞いた）。</p>
<p>20 少年：停学さ、あなたがあなたの親に停学になったと言ってごらん、彼らは困るよ。彼らはあなたが2週間どうするかと悩んだ。鞭だね、彼らはあなたを鞭打って、それでおわり。</p>	<p>20 [他語] 「どっちが悪いと思う？」という質問には直接答えなくて、相手（あなた）の文脈へ転換し、他者（彼ら・親）が困るという視点から、他人ごとのように語る。</p>
<p>C 拡張プロセス （さらなる発展）</p>	
<p>21 RB：あなたの親は、鞭打たれたこと知ったら何て言うだろう？</p>	<p>21 [異語] 〈拡問3〉「あなたの親」「鞭打たれた」という相手が使った類似表現を反復しながら、「あなたの親は何て？」という新しい問いを出す。</p>
<p>22 少年：何も。</p>	<p>22 [同語] 「何て？」に対して「何も」とことばの一部同語反復し、答えないで、とぎれる。</p>
<p>23 RB：もう一方で、停学になったとき君は好きだと言ったよね。どうして好きなの？</p>	<p>23 [異語] 〈転問・拡問4〉「もう一方で」と転換のことばを入れて、「親」から「君」へ視点を転換するために、「君は好きだと言ったよね」という変異した反復を使う。悪い方向ではなく、好きな理由を聞く方向に問いを転換して、「君はどうして好きなの？」と拡張して聞く。</p>
<p>24 少年：だって、2週間も学校が休みになるんだよ。僕は好きさ。でも、僕の親はそうじゃない。</p>	<p>24 [関語・転語] 停学は当人にとっては休みを意味する、だから「自分は好き」、けれど「僕の親は好きじゃない」という二つの立場からの思いを対比させながら語る。初めて拡張質問にまともに答えた。しかも、このときには問われなかった別の文脈の質問（21の変形）も関連づけて、親の立場からの見方も追加し、新しい意味生成を行なった。</p>
<p>25 RB：わかった。あなたの親はそれを好きじゃないから、悪くなってしまっただね？</p>	<p>25 [異語] 〈拡問5〉相手のことばに同意、少しちがったことばで反復しながら、親との関係が悪くなる原因に迫る新しい質問をしている。</p>
<p>26 少年：そう、僕の親とトラブルになっちゃう。 (Yes, I get trouble with me parents.)</p>	<p>26 [自語] 最初と同様に「悪い」と聞かれたことを「トラブル」という自分のことばに転換して語る。文法的には誤り（me parents）があるが、自分（I, me）のこととして自分のことばで親とのトラブルを語る。</p>

表5 インタビューにおける拡張質問のしかた：失敗例と成功例のマイクロアナリシス

《事例2, 事例3 年配の専門家(人類学者)に対して, 専門家(心理学者・研究者)が聞くインタビュー。インタビュアー1: 松沢哲郎 (M), インタビュアー2: やまだようこ (Y); インタビュイー: 川喜田二郎 (K)。日時: 2002年2月9日14時-18時, 場所: 京大教育学研究科やまだ311研究室。記録: DVR, ATR。やまだ(2002b)より》

事例2 拡張質問が失敗したインタビュー例	〈質問〉と〔語り直し〕の形式
<p>1K; ありのままの, 飾らない, ありのままの, この現実の世界から, フィールドワークでデータをとる。こういう学問がなきゃおかしい。で, そういうもの, とりだしたら, これはめちゃくちゃいろんなものがありますから, これをどうしてまとめるの? ということになるんです。そのときに決してね, これは分析じゃない。これはね, 総合なんです。分析じゃなくて総合, 総合。もっとはっきり言うと, 創造的総合ですな。クリエイティブなシンセシスだ。英語でいうなら。創造的総合ですわ。</p>	<p>1 (インタビュイーによる「フィールドワーク」と関連させた「創造的総合」の説明)</p> <p>(インタビュイーの自問自答の内言の外化。個人内対話。)</p>
<p>2Y; その創造的総合に, 先ほどの定性的, 質というものがどう関わるんですか?</p>	<p>2 [同語] 〈拡問1〉 Kの言った「創造的総合」をことばだけで繰り返すが, その中身については言及しない。すぐに, インタビュアー2にとって関心のある本質的に拡張的な質問に移ろうとする。</p>
<p>3K; そうなんです。それも KJ法しかないんです。</p>	<p>3 「そうなんです」という肯定的応答がかえってくる。しかし質問への返答はなされない。</p>
<p>4Y; だから創造的に総合しようとしたときになぜ, 数量化ではなくて, 質? 質を拾うような方法が必要なんですか?</p>	<p>4 [同語] 〈拡問1〉 1回目と同様に, 「創造的総合」と「質」という同じことばを使って, 同じ質問を繰り返す。</p>
<p>5K; そこが, 問題の焦点なんです。ところが今の世の中, どうかっていったら, なんでもね, 探検書くのすね, 分析, これが関わる。あるときね, 私の研究室にね, 実はこういう研修所をつくってるから, そこ研究室にしてるから。ある時ね, どこだった? もう新聞記者, きたんですよ, 科学方面の取材だって。そしたらその新聞記者がね, はじめからおわりまで, 分析, 分析ってことば, 大好き。</p>	<p>5 肯定的応答がかえってくる。しかし質問への返答はなされないままで, インタビュイー主導で, 別の話題に転換される。</p> <p>(インタビュイーによる話題の転換。インタビュイーの関心事である「分析」についての体験談にもとづく詳しい説明に移る。)</p>
<p>5Y; (笑い)</p>	
<p>6K; 始めから終わりまで。もう, 彼の使い方聞いてると不愉快になってきてね, なんかね, ただ研究するといえればいいのに, 分析するという。しまいには私は注意したんです。あんたの言葉きいてると分析がなんか, 高級な研究方法の唯一の方法みたいに聞こえると。しかし, もっと他の方法あるんだよ。データを支配する。たとえば総合というものなんです。そりゃ分析と違う。そしたらその新聞記者, えらい素直な人でね, はあ, すんまへん。頭かいていた。ま, ちょっとおだやかに研究方法といえれば, いいんだけど。こういうのが現状ですわ。</p>	

<p>事例3 拡張質問が成功したインタビュー例 (事例2の会話のつづき)</p>	<p>〈質問〉と〔語り直し〕の形式</p>
<p>1K ; で、いま、学があるなんて自分で思ってる人間にかぎって、分析という言葉にあこがれとる。なにってるんだ。分析ちゅうのは、一つの方法に過ぎない。全然逆の方法というのが創造的総合なの。で、その創造的総合があるとフィールドワークのデータが全部使えるんです。だから、現場取材と創造的総合で、第3の方法が成り立つわけだ。これなんちゅうの？ 名前つけると。何だろう？ それで私は考えて、さきほどちょっとゆうたように、野外科学だと。そういう名前が一番いいだろうと。なぜなら野外科学って、フィールドワークという言葉はすでに割にポピュラーに使われとるから……。ただそれはただ取材活動の半反面いうとるだけで、まとめの方ゆうてないんですよ。</p>	<p>1 (インタビューイによる「分析」と批判的に対比させた「創造的総合」の対話的説明。)</p> <p>(インタビューイの内言の外化。自問自答の個人内対話)</p> <p>(フィールドワークは、フィールド・サイエンス(野外科学)とは違うという説明。)</p>
<p>2Y ; ああ。なるほど。ワークの方だけで。</p>	<p>2 [略語] インタビューイの説明に同意したとともに、理解したことを短く語り直す。</p>
<p>3M ; じゃあ、理解したところでいえば、野外科学っていうのは、現場からの取材という行為と創造的総合という2つがあって、科学として全体があると。</p>	<p>3 [略語] インタビューイが1で語った要旨をまとめて語り直す。(2Yと3Mは互いに補いあう。)</p>
<p>4K ; そうです。それを分析と同じやないか、だちゅう考えはとんでもない。違うんだ。違って悪くないよ、いうことなんだ。ここなんだな、問題の焦点が。僕はそこだと思ふ。だからほんと、書齋科学あり、実験科学あり、野外科学がある。テーブルだっでご覧なさい、脚が3本あるから安定するんだと。2つしか脚がなかったらひっくりかえってしまう。</p>	<p>4 (同意。問題の焦点がそこにあるという説明。→科学には3つあるというずっと以前の話題に戻ってしまいそうになる。)</p>
<p>5Y ; そうするとですね、古典的な文化人類学でやってるフィールドワーク、ありますよね。エスノグラフィーを最終的につくる、ああいう仕事はどうなんですか？</p>	<p>5 [閑語・般語] 〈拡問2〉インタビューア2は、3つの科学という話題に戻らないで、焦点化した問題にひきもどし、それと関係する概念として、エスノグラフィーをもちだして、より一般化する。その上で〈拡問2〉「エスノグラフィーは(野外科学か)?」という核心的な質問を問う。</p>
<p>6K ; あれはたぶんに野外科学的ですな。僕はあの……</p>	<p>6 (肯定的返答・しかしインタビューイにとっても区別はあいまいで、確かな回答は得られない。)</p>
<p>7M ; たぶんに現場側からの取材ではあるな。</p>	<p>7 [異語] インタビューア1がインタビューイの立場に立って、2と3の語りの一部をインタビューイ自身のことばを使って、変奏的に語り直す。</p>
<p>8Y ; 取材ではあるね。しかしサイエンスになってるかな？</p>	<p>8 [同語] 〈拡問3〉7のことばを反復しながら、問いの形を変えて〈拡問3〉を問う。5の〈拡問1〉の問い方よりも、より具体的に焦点がしぼられ、「現場取材」ではあるが、「サイエンス(科学)か?」という選択的な問いに変えている。</p>
<p>9M ; それは創造的総合にはなっていないのかもしれない。</p>	<p>9 [異語] インタビューア2が少し違うことばで質問を補いながら、インタビューア1の質問を語り直す。</p>

10K ; あとはもう、名人芸でさ。だからね、大地理学者とかね、大文化人類学者とか何とかの作品の事実上見事にありますよ、ああいうのいいんだよ。それはそれで、立派なものができたらいいじゃないか。僕は思う。けれども……

11Y ; 先生が目ざしていらっしゃるその野外科学と、ああいう、文化人類学で伝統的にやってきたエスノグラフィーですね。最終的に、やはりかなり分厚い記述をもとにした意味化したようなものができるわけですけど、最終プロダクトはよく似てますか？ それともかなり違うんですか？

12K ; いや、たまにオーバーラップする面はあります。それはね。

13M ; 今の主張でいったらやっぱりその KJ 法という創造的総合とよびたいその方法というのはユニークなわけだから、その部分が欠落してるよね。そこを名人芸とおっしゃった。名人芸でそれをやっちゃう大旅行家、大学者はいるだろうけど、エスノグラフィーと呼んでるものの正体は現場での取材っていうのは確かにしてるけど、その創造的総合という方法を明確化、意識化したものとしてはないわけです。

14Y ; やってない。名人芸的に直感的にやってる。

15K ; そうなの。で、ここでちょっと言葉の問題で説明しましょう。このね、創造的総合でできる作品にいろんな傾向のものがあります。その中のひとつを今いいます。私はそれをモノグラフと呼ぶことが多いです。それはフィールドワークなどでとったデータを使ってそのデータを皆、創造的に総合して、こういう結果になったと書くんです。だからいきなり、長く書くことが多いですけどね。これは地理学でいうと地誌ですよ。リージョナル・ジオグラフィー。だけど一般論としていうとこれはモノグラフと言っていいだろう。モノグラフ的名作ちゅうのはこれ、かなりあるわ。それはそれでいいんです。これはいいんだけど、ただひとつ、それはもう、その人でないとできない。

16Y ; ああ、名人芸になっちゃう。

17K ; 名人芸でしかできない。で、名人芸でも、できたらおめでたい。けっこうなんです。しかし、それを突き詰めていったら、ある日突然、こう、ひらめいたの。それが KJ 法。それは 1951 年です。

18Y ; どうやってひらめいたんですか？ その……

10 [自語] それまで問われていた他者のことば「エスノグラフィー」を、「名人芸」というインタビュー自身のことばに転換して語り直す。この語り直し以後、自由な語り口になる。(3 人の共同作業によって「エスノグラフィー」は「野外科学」とはいえないという答えになってきた。7, 8, 9, 10 をみると、インタビュアーとインタビュー어의共同作業によって答えが共同生成されている。)

11 [略語・細語] 〈拡問 4〉インタビュアー2 は、要旨をまとめるとともに、より具体化した別の専門用語も交えて語り直す。その上で「エスノグラフィーと野外科学の最終プロダクトは、似ているか？」という、さらに追求する〈拡問 4〉を問う。

12 (返答・しかしあいまい)

13 [略語] インタビュアー1 は、今までの議論の要旨をまとめて語り直す。
[閉語] 今まで出てきた議論と「名人芸」と「エスノグラフィー」との関連づけをして語り直す。

14 [異語] インタビュアー2 が「名人芸」を繰り返し、異なる側面を追加して強調する。

15 [自語] 11 の問いの「最終プロダクト」を、「モノグラフ的名作」ということばに変換する。(モノグラフはたびたび用いてきたインタビュー自身のことば)

16 [異語] 再び「名人芸」ということばで語り直す。

17 [異語] 名人芸でしかできない。しかし、名人芸でも、できたらおめでたい。[自語] しかし、それを(私が)突き詰めていったら、[転語] ある日突然、ひらめいた。名人芸との方法的相違を考えるという話題について話していた。そこから、対比的に転換して(名人芸とはちがう) KJ 法のはじまりという新しい話題が生成される。

18 [異語] 〈細問〉似たことばを反復しながら、より詳しく聞く質問をする。

<p>19K ; それはねえ (うれしそうに), (笑) 言いましたか。そのころ, 1951 年というたら戦後まもなくですな。みんな腹減らして, 困るぞ困るぞ。そのころにフィールドワークに出かけたんですがね, 奈良県の天理の裏山。(このあと, KJ 法のはじまりという話題に拡張され, 話がどんどん展開する)</p>	<p>19 (新しい話題に転換し, 生き生きと話がはずんで展開していく。)</p>
--	---

表6 分析概念3 質問ストラテジー——インタビューにおいて相手が答えにくい話題を問うときのアプローチ技法

<p>3-1. 迂回</p>	<p>すぐに一番聞きたい本質的な話題に入るのではなく, 徐々に本題に入って問う。一般化した質問から入ったり, ほかの出来事の話から入るなどして, 迂回しながら本題に迫る。</p>
<p>3-2. 休止再問</p>	<p>いったん異なる話題に変えて休止し, しばらくたって文脈を変えて, 再び元の話題にもどって質問する。同じ話題や質問でも, 文脈が変われば見方を変えることができるし, 質問の意味を変えることができる。</p>
<p>3-3. 変奏反復</p>	<p>同じことばで反復して質問するのではなく, 「異語」語り直し形式を使って, 質問の表現や聞き方にバリエーションをつくりながら, 少しずつ形を変えて何度も繰り返し問い直す。</p>
<p>3-4. 形式変形</p>	<p>「何 (What)」 「どのように (How)」 で聞いた質問形式を 「どちら (which)」 などの選択形式に変える, 逆にイエス・ノーの問答形式で聞いていた質問を, 「何かありますか」 など一般的形式に変えるなど, 相手にとって答えやすい形式に変えながら問う。</p>
<p>3-5. 自他の位置変換</p>	<p>情報内容は同じでも, 主体的に相手のことばで語ってもらうために, 主体のポジションを変えたり, 聞き手を語り手に変換させるなど, 自他の関係性やポジションの変換を行いながら問う。</p>
<p>3-6. 補足説明</p>	<p>インタビュアーが相手の誤解を防ぐために説明したり, あらかじめ準備した手持ちの情報や別の文脈で語られた内容を補足的に加え, 積極的に話題の内容に踏み込みながら問う。</p>

付 記

本研究には, 科学研究費 B 「フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法」 (代表者山田洋子) と 「21COE 京都大学心理学連合」 の援助を受けた。

引用文献

Atkinson, R. (1998). *The life story interview*. London: Sage Publications.

Bakhtin, M.M. (1988). ことば対話テキスト (新谷敬三郎・伊東一郎・佐々木寛, 訳). 東京: 新時代社.

Bakhtin, M.M. (1995). ドストエフスキーの詩学 (望月哲男・鈴木淳一, 訳). 東京: 筑摩書房.

Briggs, C.L. (1983). Questions for the ethnographer: a critical examination of the role of the interview in fieldwork. *Semiotica*, 46, 233-261.

Burgess, R.G. (1984). Methods of field research2: Interviews as conversations. In Burgess, R.G. *In the field*. (pp.101-122). London: Allen & Unwin.

Charles, A.I., & Ballweg, J.A. (2003). Telephone interviews in social research: some methodological considerations. In Fielding, E. (Ed.) *Interviewing*. vol.II. (pp.95-105). London: Sage Publications.

Dohrenwend, B., & Richardson, S.A. (2003). Analysis of the interviewer's behavior. In Fielding, N. (Ed.) *Interviewing*. Vol.III. (pp.331-339). London: Sage Publications.

Fielding, E. (Ed.) (2003a). *Interviewing*. vol.I. London: Sage Publications.

Fielding, E. (Ed.) (2003b). *Interviewing*. vol.II. London: Sage Publications.

- Publications.
- Fielding, E. (Ed.) (2003c). *Interviewing*. vol.III. London: Sage Publications.
- Fielding, E. (Ed.) (2003d). *Interviewing*. vol.IV. London: Sage Publications.
- Flick, U. (2002). 質的研究入門 (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子, 訳). 東京: 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative Forschung*. Humburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
- Geiselman, R.E., Fisher, R.P., MacKinnon, D.P., & Holland, H.L. (2003). Enhancement of eyewitness memory with the cognitive interview. In Fielding, E. (Ed.) *Interviewing*. vol.II. (pp.3-18). London: Sage Publications.
- Glaser, B., & Strauss, A. (1996). データ対話型理論の発見 (後藤隆・大出春江・水野節夫, 訳). 東京: 新曜社. (Glaser, B., & Strauss, A. (1967). *The discovery of grounded theory*. Chicago: Aldine.)
- Gubrium, J.F., & Holstein, J.A. (Eds.) (2002). *Handbook of interview research*. London; Sage Publications.
- 東山紘久. (2000). プロカウンセラーの聞く技術. 大阪: 創元社.
- Holstein, J.A. & Gubrium, J.F. (2004). アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査 (山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行, 訳). 東京: せりか書房. (Holstein, J.A. & Gubrium, J.F. (1995). *The active interview*. London: Sage Publications.)
- 保坂亨・中澤潤・大野木裕明 (編). (2000). 面接法——心理学マニュアル. 京都: 北大路書房.
- Ibsen, C.A., & Ballweg, J.A. (2003). Telephone Interviews in social research: some methodological considerations. In Fielding, E. (Ed.) *Interviewing*. vol.II. (pp.95-105). London: Sage Publications.
- 河合優年. (1992). マイクロアナリシス. 東洋他 (編), 発達心理学ハンドブック, (pp. 1201-1213). 東京: 福村出版.
- 川喜田二郎・松沢哲郎・やまだようこ. (2003). KJ 法の原点と核心を語る——川喜田二郎さんインタビュー. 質的心理学研究, 2, 6-28.
- Langness, L.L., & Frank, G. (1993). ライフヒストリー研究入門 (米山俊直・小林多寿子, 訳). 京都: ミネルヴァ書房. (Langness, L.L., & Frank, G. (1981). *Lives: an anthropological approach to biography*. Novato, Calif.: Chandler & Sharp Publishers.)
- Leeuw, E.D., Hox, J.J., & Snijders, G. (2003). The effect of computer-assisted interviewing on data quality: a review. In Fielding, E. (Ed.) *Interviewing*. vol.II. (pp.106-127). London: Sage Publications.
- McCracken, G. (1988). *The long interview*. London: Sage Publications.
- 御厨貴. (2002). オーラルヒストリー——現代史のための口述記録. 東京: 中央公論新社.
- Murray, C.D., & Sixsmith, J. (2003). E-mail: a qualitative research medium for interviewing? In Fielding, E. (Ed.) *Interviewing*. vol.II. (pp.128-148). London: Sage Publications.
- Oishi, S.M. (2003). *How to conduct in-person interviews for surveys*. The survey kit 2nd ed. London: Sage Publications.
- Propp, V. (1969/1983). 昔話の形態学 (北岡誠司・福田美智代, 訳). 東京: 水声社.
- Riessman, C.K. (2003). When gender is not enough: women interviewing women. In Fielding, E. (Ed.) *Interviewing* vol.III. (pp.301-330). London: Sage Publications.
- 桜井厚. (2002). インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方. 東京: せりか書房.
- Spradley, J.P. (1979). *The ethnographic interview*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Thompson, P. (2002). 記憶から歴史へ——オーラル・ヒストリーの世界 (酒井順子, 訳). 東京: 青木書店. (Thompson, P. (1978). *The voices of the past: Oral history*. Oxford: Oxford University Press.)
- Vaughn, S., Schumm, J.S. & Sinagub, J. (1999). グループ・インタビューの技法 (井下理, 監訳. 柴原宣幸・田部井潤, 訳). 東京: 慶應義塾大学出版. (Vaughn, S., Schumm, J.S. & Sinagub, J. (1996). *Focus group interviews in education and psychology*. London: Sage Publications.)
- Wengraf, T. (2001). *Qualitative research interviewing*. London: Sage Publications.
- やまだようこ. (1986). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51. (やまだようこ (編). (1997). 現場心理学の発想 (pp.151-186). 東京: 新曜社.)
- やまだようこ・田垣正晋・保坂裕子・近藤和美. (2000). 阪神大震災における「友人の死の経験」の語りと語り直し. 教育方法の探究, 3, 63-81.
- やまだようこ. (2002a). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス. 質的心理学研究, 1, 107-128.
- やまだようこ. (2002b). 川喜田二郎さんインタビュー・語りプロトコル (未発表).
- やまだようこ. (2003a). ズレのある類似とうつしの反復——タルコフスキーの映画『鏡』にみるイメージの語りと「むすび」の生成機能. 質的心理学研究, 2, 108-122.
- やまだようこ. (2003b). フィールドワークと質的心理学研究法の基礎演習——現場インタビューと語りから

学ぶ「京都における伝統の継承と生成」. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 22-45.

やまだようこ. (2004a). 小津安二郎の映画『東京物語』にみる共存的ナラティブ. 質的心理学研究, 3, 130-156.

やまだようこ. (2004b). 語りの反復における自己と他者の声——バフチンの対話と小津安二郎の共存的ナラティブ. 臨床教育人間学, 1, 180-218.

やまだようこ. (2005). ライフストーリー研究——インタビューで語りをとらえる方法. 秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学(編), 教育研究のメソドロジー, (pp.191-216). 東京: 東京大学出版会.

(2005.5.11 受稿, 2005.10.6 受理)